リハビリテーション実施時に生じる対象者との相互作用
－担当作業療法士と実習生との比較による検証－

武捨　英理子*　福田　幸男**

The Interaction between Patient and Occupational therapist during rehabilitation
-The comparison between Occupational therapist and occupational therapy Student-

Eriko Musha and Sachio Fukuda

The purpose of this study was to examine the difference in interactions between occupational therapist (OTR) - patient and occupational therapy student (OTS) - patient. A patient was male in hospital. OTR in charge of the patient has 2year's experience in the field of occupational therapy, and OTS was senior student of training school for occupational therapy. The scenes that OTS and OTR provided occupational therapy to the patient were recorded on videotapes. The words and behavior of participants were transcribed from the pictorial records. The written records were divided into minimal units. We classified these units according to similarity in concept. As a results, we extracted 11 concepts of behavior and 7 concepts of words, it were common to OTR and OTS. After a comparison between variation of concepts and scene appearances, OTR has nonverbal communication and verbal communication with patient so that OTR enhances the sense of togetherness with patient.

Keywords: occupational therapy, interaction, verbal communication, nonverbal communication

問題と目的

病院などで実施される身体障害領域でのリハビリテーションでは、対象者は担当セラピストとマンツーマンで関わることが多く、その二者間で生じる相互作用もリハビリテーションの一貫と捉えることが出来る。特に作業療法では、机上で行う検査や練習課題が多く用いられ、そうした机を介しての作業療法を通じて、セラピストと対象者が関わる場面設定が取り入れられている。

対象者とセラピスト間で生じる相互作用の一つとして、まずはその治療課題に対する対象者の動機付けの形成が挙げられる。対象者への動機付けはリハビリテーションの治療効果へも影響する。たとえ優れた治療方針を立てたとしても、それに意欲的に参加する対象者がいなければ、作業療法は成り立たないからだ。

こうした動機付けの形成や作業療法をより効果的に促す手法として、応用行動分析学的なアプローチを実践し、セラピストと対象者間で生じる関係性を行動分析的に捉えなおすことが行われている。鈴木ら(2004)は患者の主体的かつ適切な行動を増大させるために、注目、賞賛、声かけ、笑顔、

＊教育学研究科　＊＊学校教育講座

軽いタッピングといった種々の強化刺激が使用されていると述べ、重度失語症や認知症を呈する対象者において、注目や賞賛といった強化刺激の提示の有無が対象者のリハビリテーション上での動作生起頻度を増大させるかを検討し、その有効性を示した。

作業療法士は、日々の臨床において鈴木らが定義する強化刺激となるような行為を対象者に対して意識的、または無意識のうちに治療場面に活用し、リハビリテーションを円滑に進めていこうとしていると思われる。そうした行為出現の背景には、作業療法士がこれまでに経験してきた対人交流から得られることであったり、作業療法士となってから対象者と接する機会といった経験から得られることであったりと、その個人が持ち合わせている社会的スキルやコミュニケーション能力とも関係してくると考えられる。

実際の臨床場面においては、目に見える治療プログラムや手段ではない、対象者との相互作用について着目する機会はさほど多くはない。しかし、臨床実習の為に作業療法室に「新参者」として参加する実習生の存在は、そうしたセラピストと対象者との間に生じている相互作用について改めて考えさせる機会を与えてくれる。なぜなら、実習生は対象者との関わりにおいて極めてぎこちなく、作業療法の導入にも苦労することが多いからだ。そこには対象者に対して人見知りをして慣れていないといった個人的な要素、実習という学生にとっては自分が試されている場所での対象者との関わり合いという実習生の置かれた立場から生じる影響も考えられる。しかし、作業療法士の作業療法導入におけるスムーズさに比較すると、そうした学生独自の影響以外にも作業療法士が意識的、無意識的に行えているが、学生には行えていない何かしらの行為がそこにあるように感じさせられる。対象者に対してこの実習生のぎこちなさや作業療法導入の困難さは、どのような因子に影響されているのだろうか。また、作業療法士はどのようにして対象者との関わりをおこなっているのだろうか。

箕浦(1999)は人間の諸活動を読み解く研究方法としてフィールドワークを挙げ、その解釈的アプローチであるマイクロ・エスノグラフィーについて、その中心的テーマは特定の文化集団の成員多数が反復する習慣化した行為、その行為の中に埋め込まれて伝達される「意味」であるとし、その意味は個人に内在するものではなく、主体と環境との相互作用の仮定で構成されると述べている。種村・鎌倉(2003)は高次脳機能障害として失行を呈した症例に対して、検査場面や日常生活場面についてのビデオ撮影を行い、その映像記録をもとに動作・行為の特徴を見出している。

作業療法室という空間の中で日常的に行われている対象者と作業療法士とのやりとりについても、その環境と作業療法士、対象者間で生じる相互作用の中に、我々が気づき得なかった意味があるのかもしれない。それを明らかにしていくことで、実習生と作業療法士における対象者への関わり合いの違いが見えてくる可能性がある。またそれは、教育現場における学生指導においての手がかりともなるだろう。

そこで本研究の目的として、担当作業療法士と対象者のリハビリテーションの実際及び実習生とのリハビリテーションの実際を比較し、そこで生じている相互作用の違いについて検討することとした。

方法

参加者

本研究の対象としては、総合病院整形外科に入院中の男性患者（以下対象者）１名、臨床実習中でその患者の担当となった作業療法養成学校４年生の女子学生１名及びその患者の担当作業療法士

の女性１名（経験年数２年）であった。今回参加者となった作業療法士は、日々の臨床において外来、入院患者を複数名担当しており、作業療法の導入、施行に際してはスムーズに実施が可能であった。対象者は整形外科的疾患にて入院中であり、上肢の麻痺が生じている状態であったが、コミュニケーション能力について問題はなかった。

場面

2005年10月中旬に作業療法室において、学生と作業療法士が担当していた対象者に対して、個別の作業療法を各々実施した。作業療法の内容としては箸動作練習を導入した。

手続き

まず作業療法室において、学生が対象者への作業療法として箸操作練習（図１）を導入、実施する場面をビデオにて撮影した。ビデオによる撮影に対しては研究参加者に事前に承諾を得た後、ビデオ撮影を行うが、ビデオになるべく意識せずに作業療法を実施するように教示した。ビデオは参加者が向かっている机から２ｍほど離した位置に設定した。作業療法導入における場面設定やその方法、物品の使用に関しての指示は行わず、学生に自由に判断、行動してもらった。翌日、今度は作業療法士が対象者へ作業療法を提供している場面を撮影した。その際、作業療法導入における場面設定やその方法については指示せず、自由に判断、行動してもらったが、箸動作練習に対しては学生が実施した同様の方法にて対象者へ導入、実施するように教示した。

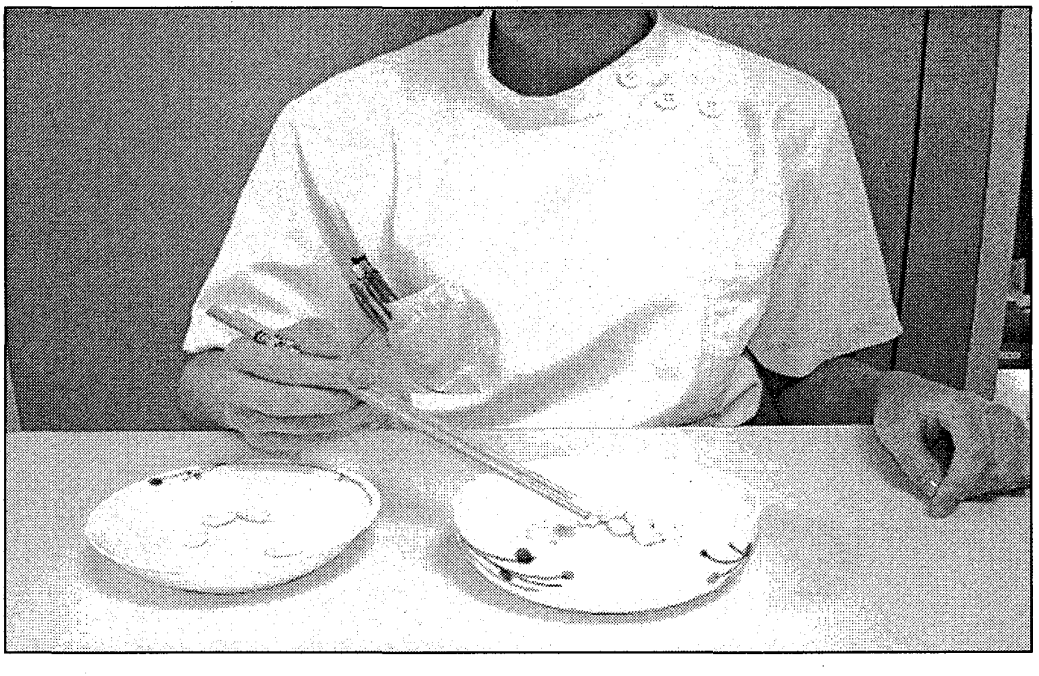

図１　箸操作練習場面

データ分析

ビデオ撮影された映像をもとに、作業療法場面において生じた学生、作業療法士、対象者の行動と発言をそれぞれ時系列に文章で記述した。その記述された文章は、意味を有するまとまりに区分し、そのまとまりをラベルとした。記述に際しては、各キーワードである学生、作業療法士、対象者、行動、発言のそれぞれをStudent、Occupational Therapist、Patient、Behavior、Wordsとし、

その頭文字から学生の行動はBS、発言はWS、作業療法士の行動はBO、発言はWO、対象者の行動は対学生時ではBSP、発言はWSP、対作業療法士での行動はBOP、発言はWOPと命名し、出現場面の順に番号をつけた（表１）。

記述された各々の行動と発言におけるラベルについて参加者以外の作業療法士2名で、類似していると思われる行動、発言別に分類した。さらに、教育学研究科指導教授にスーパービジョンを受けながら分類された行動、発言のそれぞれに概念名をつけ、その概念の具体的な定義を示した。

倫理的配慮

本研究の参加者である、対象者、学生、作業療法士に本研究の内容を説明し、同意を得た。また個人情報については個人が特定されないように配慮し、得られた情報は研究目的以外には使用しないこと、また参加者は途中で中断することの自由を保障した。

表１　作業療法士におけるラベル（抜粋）

番号	発言	番号	行動
W01		B01	皿をPtの前に設置する
W02	「最初はスポンジ、お皿でこれをやりますよ」	B02	
W03		B03	スポンジ、豆に視線を移す。
W04		B04	自助具箸・豆の入ったケースをPtの顔面に持ち上げてみせる
W05	「で、こんどはこっちのお箸にかえてスポンジ、お豆をやっていきますね」	B05	
W06		B06	ぬり箸を持ち上げてみせる。スポンジ、豆の順に指差す。
W07		B07	Ptの顔をみる
W08		B08	うなづく
W09	「じゃあ、上手なところをみせてください」	B09	笑いかける
W010	「はい」	B010	Ptに箸を手渡す
W011		B011	
W012	「ううん」	B012	首をふる
W013	「右」	B013	
W014	「あ、ごめん、左でした」	B014	
W015	「左で」	B015	皿を指差す
W016		B016	笑いかける
W017		B017	皿をみながら右の皿、左の皿の順に指さす

結果

場面設定について

対象者への作業療法導入に際して、学生が座った位置は対象者と90度の角度で左側であった。対象者との距離は約70cmであった。一方、作業療法士が座った位置は対象者と並列の位置で右側に座った。対象者との距離は約30cmであった。

また、各々の所要時間については、学生が実施した箸操作練習の所要時間は8分53秒で、作業療法士の所要時間は9分51秒であった。

学生、作業療法士における行動と発言の概念形成

学生、作業療法士共通で得られた概念数は行動11個、発言７個であった。また、行動で得られた概念名は物品操作、指示動作、移動、接近、身体接触、ジェスチャー、視線（物）、視線（人）、笑い、うなずき、無視であり、発言で得られた概念名は返答、あいづち、誘導、感嘆詞、笑い、問いかけ、指示であった。それぞれの概念名における具体的な定義を示した（表２、３）。

表２　学生の行動・発言における概念・定義及び出現場面

行動

概念	定義	出現場面
物品操作	対象者が使用する物品を準備したりセッティングする行為	BS1, 2, 5, 9, 34, 41, 43, 45, 73, 86, 88, 91, 92
指示動作	対象者に行ってもらいたい事を説明する行為（言語・デモンストレーション）	BS24, 68, 89, 90
移動	対象者との距離のとり方において離れること	BS17, 56
接近	対象者との距離のとり方においてより近づくこと	なし
身体接触	対象者の体の一部に触れるなどの行為	なし
ジェスチャー	身振りや表情で感情を示す様	なし
視線（物）	対象者以外の物に視線を動かしたり注目すること	BS6, 12, 14, 28, 40, 47
視線（人）	対象者の顔や手の動き合わせて視線を動かしたり注目すること	BS8, 18, 22, 25, 30, 35, 51, 53, 58, 61, 71, 75, 77, 81, 95, 101
笑い	対象者に笑いかけたり、自発的に笑ったりする行為	BS16, 33
うなづき	対象者からの問いかけや行為に付随して頷をふる行為	BS15, 19, 29, 44, 48, 64, 85
無視	対象者からの問いかけに対して反応しないこと	BS10

発言

概念	定義	出現場面
返答	対象者や第三者からの問いかけに対する発言	WS39, 60, 51, 56, 93, 14
あいづち	対象者からの問いかけや行為に付随する単語による発言	WS12, 19, 28, 37, 47, 64, 81, 85, 92
誘導	対象者の行動に対して助言したり奨励する言葉がけ	なし
感嘆詞	対象者の行動に付随して発する単語	なし
笑い	対象者に笑いかけたり、自発的に笑う際の発声	WS22, 35, 50, 84, 95
問いかけ	対象者に対して質問したり、聞き返す行為	WS31, 54, 57, 66, 68, 71, 75, 78, 82, 96, 98, 99,
指示	対象者に行ってもらいたい行動の説明や注意に関する言語指示	WS3, 4, 21, 23, 33, 40

表３ 作業療法士の行動・発言における概念・定義及び出現場面

行動

概念	定義	出現場面
物品操作	対象者が使用する物品を準備したりセッティングする行為	B01, 10, 38, 50, 51, 53
指示動作	対象者に行ってもらいたい事を説明する行為（言語・デモンストレーション）	B04, 6, 15, 17, 54, 55, 32, 57
移動	対象者との距離のとり方において離れること	なし
接近	対象者との距離のとり方においてより近づくこと	B027, 80, 171
身体接触	対象者の体の一部に触れるなどの行為	B029, 30, 37, 58, 147, 197
ジェスチャー	身振りや表情で感情を示す様	B012, 151, 156
視線（物）	対象者以外の物に視線を動かしたり注目すること	B03, 33, 82, 84, 88, 117, 127, 169, 176, 180, 192, 193, 195
視線（人）	対象者の顔や手の動き合わせて視線を動かしたり注目すること	B07, 20, 25, 28, 31, 39, 41, 45, 52, 56, 62, 66, 68, 72, 77, 86, 87, 89, 95, 96, 101, 103, 104, 105, 109, 110, 111, 112, 118, 122, 124, 130, 131, 132, 139, 141, 148, 150, 159, 160, 168, 187, 190, 191
笑い	対象者に笑いかけたり、自発的に笑ったりする行為	B09, 16, 22, 26, 43, 48, 60, 63, 64, 67, 76, 85, 99, 108, 113, 119, 121, 123, 126, 133, 136, 138, 142, 146, 149, 152, 157, 167, 173, 189, 196
うなづき	対象者からの問いかけや行為に付随して頸をふる行為	B08, 19, 21, 24, 35, 47, 59, 100, 107, 115, 134, 140, 153, 158, 162, 165, 179, 185 188, 194
無視	対象者からの問いかけに対して反応しないこと	なし

発言

概念	定義	出現場面
返答	対象者や第三者からの問いかけに対する発言	W019, 82, 83, 92, 94, 108, 138, 151, 152, 165, 176, 181
あいづち	対象者からの問いかけや行為に付随する単語による発言	W010, 12, 23, 29, 38, 41, 44, 59, 71, 74, 76, 77, 115, 126, 134, 136, 140, 148, 158, 179, 184, 185, 189
誘導	対象者の行動に対して助言したり奨励する言葉がけ	W09, 34, 72, 75, 87, 117, 127, 159, 196, 197
感嘆詞	対象者の行動に付随して発する単語	W061, 64, 121, 146
笑い	対象者に笑いかけたり、自発的に笑う際の発声	W065, 70, 95, 156
問いかけ	対象者に対して質問したり、聞き返す行為	W026, 43, 48, 50, 52, 79, 98, 99, 101, 107, 122, 139, 141, 142, 162, 167, 171, 173, 174, 177, 187
指示	対象者に行ってもらいたい行動の説明や注意に関する言語指示	W02, 5, 13, 14, 15, 31, 33, 37, 54, 56, 128, 144, 149

対象者における行動と発言の概念形成

対象者における概念数は行動においては9個、発言においては6個であった。また、行動で得られた概念名は課題遂行、移動、ジェスチャー、視線（物）、視線（人）、笑い、うなずき、合図、休止であり、発言で得られた概念名は返答、あいづち、感嘆詞、笑い、問いかけ、独語であった。それぞれの概念名における具体的な定義を示した（表４、５）。

表４　対象者の行動・発言における概念・定義及び出現場面（対作業療法士）

行動

概念	定義	出現場面
課題遂行	セッティングされた道具を使用して提示された課題（箸操作）を行うこと	BOP37, 41, 43, 47, 58, 61, 67, 68, 86, 96, 101, 113, 114, 119, 125, 129, 145, 154, 155, 181, 189, 194
移動	座る位置を修正すること	BOP36
ジェスチャー	身振りや表情で感情を示す様	BOP151
視線（物）	提示された物に視線を動かしたり注目すること	BOP1, 78, 150
視線（人）	セラピストの顔や手の動き合わせて視線を動かしたり注目すること	BOP3, 11, 33, 143, 187
笑い	セラピストに笑いかけたり、自発的に笑ったりする行為	BOP9, 42, 48, 64, 69, 97, 121, 138, 146, 162, 164, 170, 172, 186
うなづき	対象者の行為に付随して頸をふる行為	BOP7, 15, 52, 54, 109, 139, 142, 175, 182, 188
合図	セラピストに動作や仕草で問いかけを示す様子	BOP17, 34
休止	課題遂行中に手を休める	なし

発言

概念	定義	出現場面
返答	セラピストからの問いかけに対する発言	WOP49, 106, 158, 172, 178, 182
あいづち	セラピストからの問いかけや行為に付随する単語による発言	WOP125, 139, 149, 169, 175, 188
感嘆詞	自分自身の行動に付随して発する単語	WOP61, 63, 113, 124, 155, 181
笑い	自発的に笑う際の発声	WOP93, 140, 171
問いかけ	セラピスト対して質問したり、聞き返す行為	WOP11, 17, 58, 73, 78, 90, 91, 97, 114, 143, 166, 170, 184, 186, 189
独語	課題遂行時に相手なしに一人で物を言う行為	WOP64, 68, 81, 84, 135, 137, 163, 164, 193

表５ 対象者の行動・発言における概念・定義及び出現場面（対学生）

行動

概念	定義	出現場面
課題遂行	セッティングされた道具を使用して提示された課題（箸操作）を行うこと	BSP1, 3, 16, 20, 27, 30, 42, 51, 75, 91, 92
移動	座る位置を修正すること	BSP93
ジェスチャー	身振りや表情で感情を示す様	BSP85
視線（物）	提示された物に視線を動かしたり注目すること	BSP89
視線（人）	セラピストの顔や手の動き合わせて視線を動かしたり注目すること	BSP9, 11, 26, 37, 58, 73, 82, 87, 95
笑い	セラピストに笑いかけたり、自発的に笑う行為	BSP32, 48
うなづき	対象者の行為に付随して頸をふる行為	BSP2, 29, 44, 71
合図	セラピストに動作や仕草で問いかけを示す様子	BSP19
休止	課題遂行中に手を休める	BSP36

発言

概念	定義	出現場面
返答	セラピストからの問いかけに対する発言	WSP54, 61, 62, 64, 66, 69, 73
あいづち	セラピストからの問いかけや行為に付随する単語による発言	WSP32, 78
感嘆詞	自分自身の行動に付随して発する単語	なし
笑い	自発的に笑う際の発声	WSP98
問いかけ	セラピスト対して質問したり、聞き返す行為	WSP7, 9, 11, 26, 27, 38, 42, 43, 46, 48, 58, 68, 79, 82, 89, 95
独語	課題遂行時に相手なしに一人で物を言う行為	なし

各概念出現場面について

学生と作業療法士における行動面で得られた各概念の出現場面については、学生では、接近、身体接触、ジェスチャーの出現は認められなかったが、作業療法士では認められており、中でも身体接触は回数が多かった。一方、作業療法士では移動、無視の出現が認められなかった。出現場面が一番多い概念は、学生、作業療法士ともに視線（人）であったが、出現回数は作業療法士の方が学生より多かった。次に多かった概念は作業療法士では笑い、うなずきと続くが学生では物品操作、うなずきと続き、笑いは作業療法士と出現頻度を比較すると学生では減少していた。

全体的に学生における行動の出現頻度は作業療法士より減少していたが、物品操作は学生の方がより多く認められた（図2-A)。

発言面で得られた各概念における出現場面については、学生では、誘導、感嘆詞の出現は認められなかった。作業療法士においては、誘導の出現場面は10回、感嘆詞の出現場面は4回認められた。出現場面が一番多い概念は、学生は問いかけ、あいづちと続き、作業療法士ではあいづち、問いかけとなっており、順序が学生、作業療法士で逆転していた。言語面における概念の出現頻度において、どの概念においても作業療法士の出現頻度の方が多くなっていた(図2-B)。

対象者の行動における各概念出現場面では、対学生時で一番多かったのは、課された課題を行う

課題遂行で、次に視線（人）、うなずきであった。対作業療法士では、同様に課題遂行が一番多く、次に笑い、うなずきが多かった。課題遂行においては、対作業療法士の方がより頻度が高くなっていた。笑いについて、学生時での出現頻度は２回であったのに対して、作業療法士の時は14回と作業療法士との関わりの方が笑いの出現頻度が高かった。一方、視線（人）について学生は９回であったのに対して、作業療法士の時には5回であり、学生との関わりの方が、対象者がより多く学生の顔や動作に視線を合わせていた。うなずきにおいては、学生の時よりも作業療法士の時の方がより頻度が高くなっていた。また、対学生のときには課題遂行中に手をやすめるといった休止が出現したが、作業療法士の時には認められなかった(図3-A)。

対象者の発言については、対学生の時は問いかけが一番多く、次に返答、あいづちであった。対作業療法士の時も同様に問いかけが一番多く、次に課題遂行時の独語が多かった。学生との関わりでは感嘆詞、独語の出現は認められなかった。問いかけ以外の概念においては学生よりも作業療法士との関わりの方で出現頻度が高かった(図3-B)。

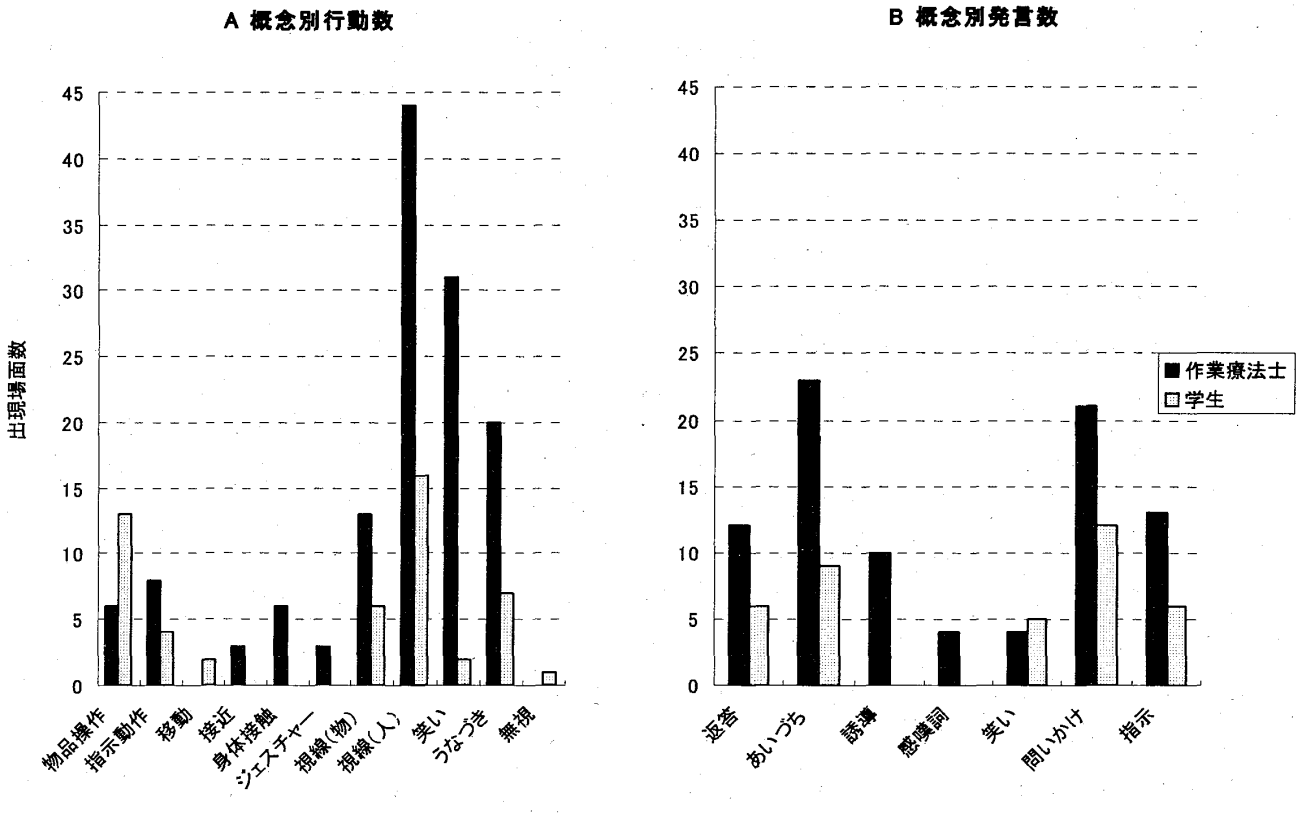

図２　学生と作業療法士における概念別出現場面数

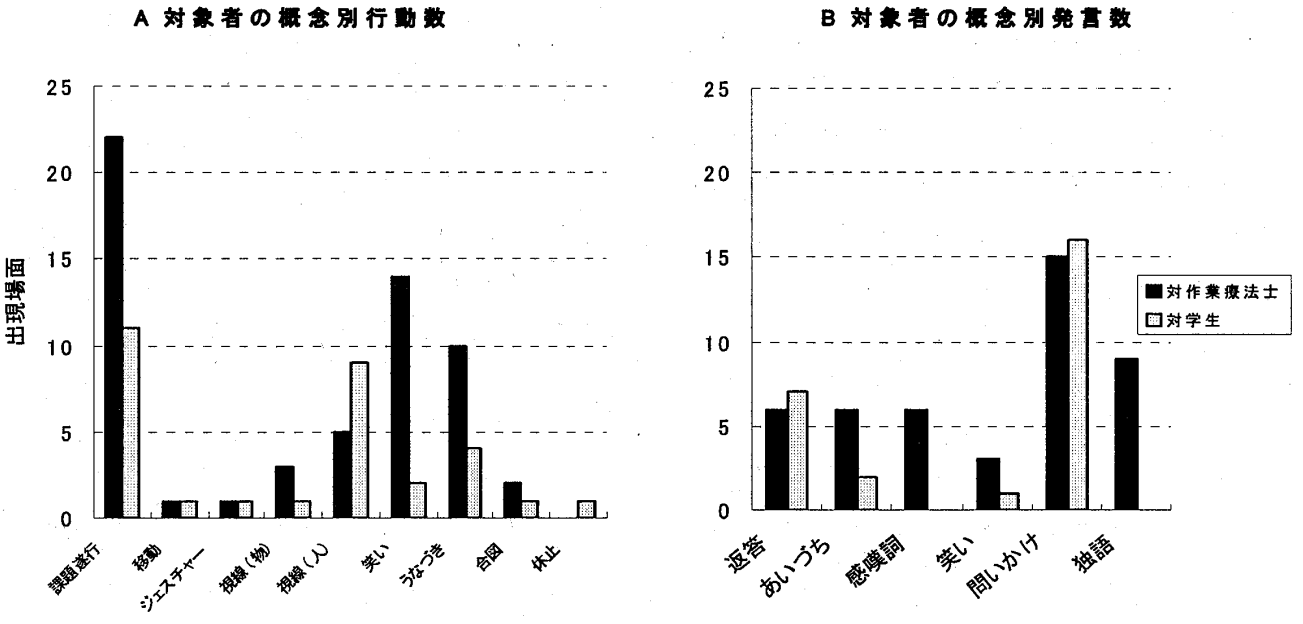

図３　対象者における概念別出現場面数

考察

今回、作業療法という枠組みの中における治療者と対象者に生じる相互作用を探るために、実習中の学生と担当作業療法士それぞれの作業療法場面をビデオ撮影し、分析を行ったところ参加者の行動と発言に対して概念に分類することが可能であった。そこで、得られた概念における参加者間での相違について考察し、そこで生じた相互作用について、及び本研究の限界や今後の課題について考える。

場面設定の違いについて

学生と作業療法士において、対象者に対してどのような位置にどの位の距離で座るか、という場面設定のとり方に違いが生じていた。座った位置に関しては、学生は対象者と90度の角度になる位置をとっており、一方、作業療法士は並列の位置に座っていた。熊谷(1990)は、人が他者と相互作用を行う際の他者との距離について「他者との親しさ」の水準の違いが同一空間を共有するときの座席選択に反映されるかについて調査したところ、結果として「親しい他者」に対しては視線をまったく交差させない並列する席で最も近い位置が選択され、最も遠い位置で視線交差の可能性が比較的多い席が不自然であると捉えられたとし、一方、「非親しい他者」に対しては、視線を直角に交差させる隣接する席及び比較的離れた席が選択される傾向があり、視線を交差させないで並列で隣り合う席または正面から向き合う席は避けられるとして、他者との親しさの水準で表される空間関係は、距離、向き、視線が関わっていると述べている。

作業療法士の座った位置は、熊谷の研究における「親しい他者」に対してとる位置であり、一方、学生の座った位置は「非親しい他者」に対する位置となっていた。この違いについて熊谷の提示した親しさの水準から考えた場合、担当していた期間の違いにより、作業療法士の方が対象者とより親しい他者になっていた可能性が挙げられる。一方、作業療法を導入するという視点から考えると、並列の隣り合う席に座った方が、対象者の上肢の介助など作業療法施行中に必要とされる援助がし易いという面もある。関わっていた時間的な差異が学生と作業療法士との間に生じてはいたが、日々の臨床において、作業療法士は時間をかけてゆっくり「親しい他者」となるのではなく、援助のし

易さなども考慮して作業療法導入時にはすぐに「親しい他者」がとりやすい座席へ積極的につく傾向があるとも考えられるであろう。

次に、対象者との距離に関しても学生と作業療法士間において違いが生じていた。Hall(1966)は対人距離を密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離の４つに分類した。学生のとった距離は個体距離に入り、二人が互いの身体に触れ合うことも可能な距離をとっている。一方、作業療法士は密接距離であり、ごく親しい間柄で許される距離内にはいっていた。この個人空間の違いについては、作業療法士の方がより対象者へ近すぎる位置をとっていたと判断できる。ここでも座席の位置と同様に、対象者への親しさの違いや、援助のし易さといった物理的な理由による結果と捉えられるし、また、今回参加者となった作業療法士においては、個人特性として他者に対してより親密な距離内に入りやすい傾向があったのかもしれない。

形成された概念について

学生と作業療法士の行動で得られた概念については、提示した課題に関連する行動として、物品操作、指示動作が示された。また、移動、接近、身体接触など対象者との距離に関する概念が挙がった。ジェスチャー、視線、笑い、うなずき、無視は対象者とのコミュニケーションに関わる概念と考えられる。山根(1998)は、言葉以外のコミュニケーションの媒体として視線、アイコンタクト、表情、身振り、動作などを含む身体表情を提示している。身体表情とは、意識された表情ではなく、身振りや動作などに無意識的に現れる心の動きのことであり、言葉は知的フィルターのチェック(知的防衛）を受けるが、視線やアイコンタクト、表情、姿勢、身振り、動作といった身体的に表現されるものは、知的防衛を越えてありのままが表出されやすいと述べている。今回、概念に挙がったジェスチャーや視線などは、山根が示した身体表情と捉える事ができるだろう。作業療法の導入や遂行時にはそうした言葉以外の表現を使用し、対象者と接していると考えられる。

発言で得られた概念については、提示した課題に関連する発語として、指示、誘導が挙がり、その他の概念は対象者とのコミュニケーションに関わるものと考えられる。中でも感嘆詞に関して、本研究では「対象者の行動に付随して発する単語」と定義し、発言というよりも発語に近いものを指している。山根(1998)はコミュニケーションの成立には①相手の話を聞く姿勢にある二人の一方から、②相手に話しかける、③聞いた人がこういうことですねと確認のフィードバックをする、④話し手からそれに対する適否が示されるというやりとりが必要であると述べている。発言の概念で挙がった感嘆詞は、コミュニケーションの成立における③のフィードバックを即時に対象者へ示すための発語とも捉える事ができるのではないだろうか。さらに、感嘆詞出現場面（表６）のようにその場面の出来事に即した発語の存在により、作業療法士と対象者はその場面の共有感がより強まると考えられる。そうした共有感を持つことで、作業療法の導入や遂行をスムーズにさせようとしているとも考えられる。

表6 感嘆詞出現場面例

番号	作業療法士発言	番号	作業療法士行動	番号	対象者発言	番号	対象者行動
例1)							
OW119		BO119	Ptが豆をつかむのを見て笑う	WOP119		BOP119	豆を箸の上に乗せて移動する
OW120		BO120		WOP120		BOP120	
OW121	「おお～」	BO121	笑う	WOP121		BOP121	笑う
例2)							
OW145		BO145		WOP145		BOP145	Ptがつまんだ豆をはじいておとす
OW146	「おおーっと」「ちょっと」	BO146	笑う	WOP146		BOP146	笑う
OW147		BO147	Ptの肩をたたく	WOP147		BOP147	

学生と作業療法士での概念の違いについて

行動面における概念の出現場面において、学生では、接近、身体接触、ジェスチャーが認められなかった。一方、作業療法士では概念別にみてみると接近では、BO27:対象者が座っている車椅子の背もたれをさわる、BO80:顔を対象者に近づけて前かがみになる、BO171:対象者の口元に顔をよせるという場面において認められた。各々の場面状況を見ると、BO27では対象者が行っている行為をより近くで見るという行動から近づいていった場面であり、BO80、171に関しては、対象者の発言がうまく聞き取れず、聞き返す発言とともにより聞こえやすいように接近した場面であった。BO27での接近場面は、単純に対象者が行っている作業が見えやすいように近づいたとも考えられるが、作業療法士が課題を行っている対象者との共有感を強めるために、対象者が行っている作業について「注目しているよ」という合図として接近していったとも捉えられる。

身体接触については、作業療法士においてBO29:対象者の肩をさわる、BO30:前かがみになった対象者の姿勢を矯正する、BO37:対象者の肩をささえる、BO58:手の位置を修正する、BO147:対象者の肩をたたく、BO197:皿の端をもってから対象者の肩と手を持つ、といった場面において身体接触が認められた。BO29、30、37、58に関しては、対象者の姿勢や手の位置など作業を遂行する上でのよりよい状態へ修正を施すための接触となっていた。作業療法では、言語指示だけでなく、実際に身体に触れながら身体位置や運動方向への誘導が行われていることが分かる。

ジェスチャーについては、作業療法士においてBO12:首をふる、BO151:頭を下げる、BO156:対象者の顔を驚いてみるという場面にて認められた。BO12は対象者からの質問に対して「違う」ことを示すための行為であり、BO151は「こんにちは」と挨拶した際に起こした行為で、共に社会慣習にそっての行動である。子安(2005)は、非言語コミュニケーションは社会心理学等で取り上げられてきた重要な要素とし、表情、視線、姿勢、ジェスチャー、手話、絵文字、服装、対人距離、沈黙を挙げている。対象者とのコミュニケーションにおいて、ジェスチャーといった非言語コミュニケーションが発現していたことは、作業療法士が対象者とよりスムーズなコミュニケーションがとれるように使用していたと考えられる。一方、BO156においては、対象者が作業療法士の指示した動作を省略して行おうとした行為に対しての驚きと否定を示すために作業療法士が驚いてみせたという状況であった。対象者が指示と間違った行為を起こした時に、言葉で「違いますよ」と示した場

合は、より対象者にはっきりと意思伝達することが可能であるが、受け取り方によっては強い否定を感じさせる事がある。ジェスチャーで示す場合は、言葉で示すよりはあいまいさを招くが、強い否定を込める危険性は少なくなるであろう。対象者に対して、実施している作業について怒ったり、否定したりすることで対象者の作業への動機付けを損なわないように、という配慮が作業療法士の中で意識的、無意識的に生じていたとも考えられる。

作業療法士では認められなかったが、学生で出現した行動として移動ではBS17:椅子を少し動かし対象者から離れる、BS56:対象者から少し身体を反らして離れるが認められた。無視ではBS10:対象者の問いに反応なし、が示された。移動について、各場面状況について、BS17は対象者が課題の箸操作を開始した後に、学生は椅子を動かして離れるという行動をとっている。そこには課題の導入が出来たので、それを少し離れた位置から観察しようとしたか、もしくは対象者の作業の邪魔にならないように離れたのかもしれない。それらの意図があったとしても、それらは作業療法士と反対の行動となっているのが分かる。作業療法士は課題の取り組みが可能となってからも、より対象者の近くに位置し、援助の必要が生じた場合は接触も行っていた(表３：BO29、30、37、58)。学生にとっては、作業の導入後に生じうる介助や支援を実施する方法が分からず、そのタイミングを計るといったことが困難であるのかもしれない。学生に対する教育において、こうした作業療法導入後での観察の仕方や介助、誘導方法についての指導の必要性があると考えられる。

学生と作業療法士双方で出現場面が一番多かった概念は、視線（人）であった。各々の代表的な場面について、学生ではBS18:対象者が箸でスポンジを移動する様子を眺める、BS22:対象者の顔をみるといった、実際に作業を行っている対象者の手元や会話時に対象者の顔をみる過程においてその行為が認められている。作業療法士ではBO7:対象者の顔をみる、BO25:対象者の手元が動く方向へ視線をうごかす、BO105:対象者の背中や姿勢をチェックという場面で認められていた。作業療法士は、学生と比べると実際に行っている対象者の作業の動きに応じて視線を動かしたり、対象者の姿勢をチェックしたりと、その場面で生じている流れに合わせた視線の動きをしていた。視線は、山根(1998)の示す身体表情や子安(2005)の非言語コミュニケーションに取り上げられるように、コミュニケーション上重要な位置を示していると考えられる。作業療法士は、対象者の動きに合わせた視線の動きを行うことで、対象者が黙って作業を行っていても、対象者との共有感を失わないような配慮が生じていたものと考えられる。山崎ら(2001)はリハビリテーションに対しての参加動機付けを高めるための方法として、強化刺激の必要性について述べており、その即時的なものとしては治療者からの注目や褒め言葉を挙げている。作業療法士の視線（人）は対象者にとって、自分の行っている事を「見ていてくれる」につながり、それは大きな強化刺激となりうるのだと考えられる。

次に作業療法士では視線（人）の次に多かった概念の笑いについて考察する。行動場面においての笑いは声を発せず、「対象者に笑いかけたり、自発的に笑ったりする行為」と定義した。作業療法士では多く観察されており、代表的な行動では、BO9、149でみられた「じゃあ上手なところをみせてください」「姿勢も気をつけながら」など対象者への誘導の声かけの際に出現する笑いやBO99の対象者へ何か問いかける場面での笑い、BO48、126の「お疲れ様、楽勝ですね」と対象者の作業に対する賞賛をこめた言葉がけの場面で笑い、BO60、67、113での対象者が１つ豆移したところで微笑む、対象者が豆をつかんでいるのをみながら笑う場面といった対象者の行動と同調する場面での笑い、BO196の「がんばって、あとちょっと」と対象者を励ます際に出現した笑いが認められた。

桐田・遠藤(2003)は対人相互作用場面における笑いについて、その生起状況を調査したところ、笑いは話題の内容よりは会話する状況とより強く関連すると述べている。作業療法士の笑いのほとんどは、おかしな出来事に対して笑いが生じているのではなく、対象者と共有している空間の中において、そこで生じている状況に合わせた笑いと捉えることができるだろう。その状況は、対象者への誘導であったり、賞賛、同調、奨励の場面であり、そうした状況に付随した笑いとは、作業療法の実施を円滑に実施させるためであったり、対象者のモチベーションを高めるための方法であるとも考えられる。

学生、作業療法士とも3番目に多かった概念としてうなずきが挙げられる。出現した場面をみてみると、学生の場合はそのほとんどが対象者から発した問いかけに対してうなずいてみせるといった受身的なうなずきであるのに対して、作業療法士の場合は対象者からの質問に対しての返答や聞き返す場面でのうなずき以外に、対象者への練習方法についての説明後に確認するようにうなずいていたり(BO8)、対象者の箸操作を見ながらうなずいていたり(BO21、BO47、BO59、BO115、BO158、BO194)、WO34:「姿勢も気をつけながらがんばってみてください」といった対象者への誘導発言の際のうなずきや、WO162:「うまい」BO187:「すごいうまくなりましたね」といった対象者の作業に対する賞賛する発言の際のうなずきが見られており、作業療法士はより能動的にうなずきを使用しているのが分かる。こうした非言語コミュニケーションとしてのうなずきの存在は、対象者への作業療法導入や遂行に際し、より円滑に行えるような配慮の為の手法と捉えることができる。

対象者の概念について

対象者の行動における概念において、学生が関わった場合と作業療法士が関わった場合とでは、笑いと視線(人)、うなずきそして課題遂行での出現頻度に違いが生じていた。まず笑いについては、作業療法士との関わり合いでの方がより出現頻度が高くなっていた。この「笑い」の概念は、作業療法士においても出現頻度が高かった項目であった。作業療法士が対象者へ笑いかけたり、微笑みながら作業をみつめたりしたことなど、作業療法士の振る舞いによる相互作用の結果として対象者の笑いも増加したものと考えられる。

うなずきに関しては、作業療法士との関わり合いの方で出現頻度が高くなっていた。陳・小熊(2000)は聞き手の心的態度という要因が、発語のあいづちやうなずきの頻度に影響を及ぼしているとし、相手の話に承服しがたい場合には、あいづちやうなずきの頻度が低下すると述べている。また、話し手は聞き手のあいづちやうなずきから意思を推測しつつ、会話をスムーズに運んでいくのだとも述べている。今回、学生との関わり合いでうなずきが低下していたのは、学生から能動的に対象者へ話しかける場面自体が少なかったことも影響していると考えられるが、作業療法士は、対象者のうなずきなどの非言語的な表出を敏感に受け取り、スムーズな会話を形成するように働きかけていたと考えられる。対象者が発する言語的なメッセージだけでなく、非言語的な面にも注意を払いながら援助していく必要性が伺える。

本研究の限界と今度の課題について

今回、対象者への作業療法導入やその遂行場面をビデオ撮影し、その映像をもとに学生と作業療法士の発言と行動の比較、及び対象者の発言と行動について観察した結果、幾つかの概念形成が可能であった。その得られた概念の種類の違いと出現場面数の違いによる検討で、作業療法士は対象

者との関わり合いの中で言語・非言語コミュニケーションを巧みに利用し、作業療法遂行における対象者との共有感を強めるように努力していたと考えられる。そうした作業療法場面の共有感が、対象者の作業療法における行為の発現につながっていたと思われる。

本研究の限界として、学生、作業療法士及び対象者間での相互作用に関しての解釈は、筆者が非参与観察という立場をとった上で得られたものである。作業療法士の行為が、無意識的なものであったのか、意識的なものであったのか、また意識的であったとしたら、その行為の意図は何であったのかについては、観察では明らかにすることができなかった。今後の課題として、学生及び作業療法士双方において、概念で認められた行為についての意図を明らかにする必要がある。また、肯定的感情特性の高い人ほど、援助の提供といった対人相互作用量が増加することより(水子ら、2002)、今回参加者となった作業療法士の個人的特性も対象者との関わり合いに影響を及ぼしていた可能性も考えられる。今後は、作業療法士の個人的特性の側面も配慮した分析の集積が必要である。

引用文献

陳　姿菁・小熊利江　(2000) 話題に対する聞き手の心的態度が発話のあいづちとうなずきの出現に及ぼす影響　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, 3, 237-247.

Hall,E.T., The hidden dimension, Doubleday, 1966; 日高敏隆・佐藤信行訳, かくれた次元, みすず書房, 1970.

桐田隆博・遠藤光男　(2003)　面接場面の笑い－笑いながら話す現象(laugh-speak)とその機能－信学技法, 102, 13-18.

子安増生　(2005)　「心の理論」からみたコミュニケーション　作業療法ジャーナル, 39, 880-885.

熊谷信順　(1990)　対人相互作用水準と対人距離との関係　山口大学教育学部研究論叢第3部, 39, 27-35.

箕浦康子　(1999) フィールドワークの技法と実際－マイクロ・エスノグラフィー入門－ミネルヴァ書房

水子　学・寺嵜正治・金光義弘　(2002) 感情特性が対人相互作用量に及ぼす影響－結果予期と効力予期の媒介的役割　性格心理学研究, 10, 98-107.

鈴木　誠・畠山真弓・大森みかよ・古川綾子・笹　益雄　(2004) 重度失語および重度痴呆患者における注目・賞賛の有効性　作業療法, 23, 198-205.

種村留美・鎌倉矩子　(2003)　1失行症例にみられた動作・行為の特徴　作業療法, 22, 29-40.

山根　寛　(1998)　作業療法における「つたわり」－ことばを超えたコミュニケーション－　作業療法, 17, 477-484.

山崎裕司・長谷川輝美・山本淳一・鈴木　誠　(2001)　理学療法における応用行動分析学　3. 治療場面への応用　理学療法ジャーナル, 35, 219-225.